



TITLE:

附属図書館100周年：「『静脩』総目次」を読む(2)

AUTHOR(S):

松田, 博

CITATION:

松田, 博. 附属図書館100周年：「『静脩』総目次」を読む(2). 静脩 1999, 36(2): 3-5

ISSUE DATE:

1999-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37542>

RIGHT:

が、多くの事例を比較したり、共通の傾向を見ようとすれば、一定条件下での精密な撮影と、それをスキャナーにかけて濃淡の分布を数理的にとらえなくてはということになり、国立民族学博物館の杉田繁治氏、電力中央研究所の小島三弘氏ほかの方がたの協力を得ること10年。件の小口部分の映像を0から255までの濃度をもつ微小点群に転換し、それらを丁の配列に対応させた数百の線上に数量として集積して棒グラフに表示し、資料ごとにできるそのグラフの上端の凹凸の形状の互いの「距離」を相関係数を求めて類別するという方法におちつき、ようやく昨年、『永代節用無尽蔵』64点の使われかたの類型分析を本学人文科学研究所の調査報告に公表した。

そこでは、情報圧縮上の無理が少ないという理由で浮上した9範疇分類に注目してみた。そのうちのひとつが数の上で他をしのいだ。手沢では、和歌や謡曲に執心で辞書を頻繁に使用し、

五行占いにもこだわり、古今の雅びをしたう気配も濃厚。それが京都上京下京、宇治、丹波善王寺、近江八幡、金沢、仙台、和歌山で使われていたものの中にあり、旧蔵者の家業も、宮廷や城勤め、奥医師、漢学者、呉服屋、畳表問屋、飛脚業などとさまざまであった。18世紀前半に西川如軒が、日本では庶民が高位の公家武家のまねをしたがると呆れていたが、その傾向、kugefication（筆者造語）を物語るようなデータが出たともいえる。

ただし、デジタル化による画像処理は、ナマ資料の抽象化の積み重ねにほかならない。とりあえずの分類範疇はモデルではありえても「実態」そのものではない。それでも、地域や職種や階層に「特有」な暮らしむきがあるはずだとこのこれまでの思い込みがほぐれ、自由な発想をうながされる楽しみがわいてくる。

（よこやま としお）

附属図書館100周年

「『静脩』総目次」を読む

附属図書館情報サービス課雑誌・特殊資料掛

松 田 博

『総目次』には「資料紹介」の目次欄がある。京都大学が所蔵する資料について、もちろんすべてではないが、紹介・解説のあったものを別立て目次にしたものである。京都大学所蔵の参考図書や特殊文庫にはどのようなものがあるかが通覧でき、内容が知りたいと思えば解説等本文に早速いきつくという、たいへん有効で便利な目次であるといえる。

この「資料紹介」の目次を読むと、2回以上解説が付された特殊文庫で、しかも比較的長文の解説のあるものを絞ってみると以外に少ないことに気がつく。それには相当の理由があったのであろうが、ひとまずここではこうした条件にかなうものとして「上野文庫」、「旭江文庫」、「舎密局・三高資料」の3つがあることを指摘しておく。

経済学部の所蔵にかかる「上野文庫」は、朝日新聞社元社主上野精一の旧蔵書で、ジャーナリズム史関係をはじめ政治史、社会史、思想史

関係資料など27,000冊におよぶコレクションである。1955年から40年間寄贈され続けたが、その寄贈期間の長さにおいても上野文庫に匹敵するものは全くない。上野文庫が京都大学に寄贈されるに至る経緯やその内容については、『上野文庫目録』中の「上野文庫由来記」や「上野文庫概観」に詳しい。また、『静脩』誌上での紹介・解説もダントツの4回以上を数え、解説内容も長文に類する。いずれの解説も文庫のなかの個別資料、あるいは特定主題にそった資料群に焦点を当てたものだが、文庫内容の質量共の豊かさと旧蔵者上野精一の見識の高さを語る内容となっている。それだけに今後も上野文庫についての紹介はあると思うが、ここでは文庫の1点であるアーネスト・サトウ旧蔵本についてふれておきたい。

「上野文庫1冊のインキュナビュラについて」（1）に次のような表現が見られる。“ところで、どのような経緯でこのインキュナビュラが

上野文庫に架蔵されることになったのか。本書だけでなく、同目録の「宗教史」の項には17世紀までの出版物が数十点集中している。とくに多いのは16世紀から17世紀にかけての『日本イエズス会年報』の類である。この疑問は、・・・”という内容である。高橋俊哉はこの自ら抱いた疑問に対し、“単に新聞の一形態としての見本のつもり”という上野精一自身のことを引用しながら、インキュナブラをはじめ『日本イエズス会年報』等これら資料が新聞の見本として架蔵されたと結論づけている。“見本のつもり”で購入された資料が総計100点を超えるという事実は、それ自体おどろくべきことだが、むしろこのことは経営者としての姿以上に、研究者としての上野精一の姿を大きく浮かび上がらせるものとなっている。とまれ、この資料群の中の1点にアーネスト・サトウの旧蔵書が見られることである。それは、『A' true description of the Mighty Kingdoms of Japan and Siam. Written originally in Dutch by Francis Caron and Joost Schorten. [sic] And now rendred into English by Capt. Roger Manley. London, S.Broun, 1663.』と題されるもので、同じ1663年にニュールンベルグで刊行された“Wahrhaftige Beschreibungen zweyer mächtigen Königreiche, Jappan und Siam.”の英訳版である。『日本・シャム王国実記』と称されるこの書は、カロンの『日本大王国誌』1661年版を底本に、スホーテンの『シャム王国記事』を加えたもので、『J.Laures『Kirishitan Bunko 吉利支丹文庫』1957』によれば、京大以外に東洋文庫、天理図書館等にその所蔵が確認されるものである。カロンの『日本大王国誌』について一言すると、これが初めて公にされたのは“Begin ende Voortgangh, Van de Vereenighde nederlantsche Geoctroyeerde Ost-Indische Compagnie. ... 1645.”においてであり、また単冊としては1648年にアムステルダムで刊行されている。「上野文庫」には1649年にアムステルダムで刊行された版本が所蔵されている。この『日本・シャム王国実記』英訳版は、サトウ自身が入手した時点ですでに重複購入であったことが『Bibliographischer Alt-Japan-Katalog』No.288から推量されるものである。

「日本イエズス会」関係のものとして『The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610. Privately printed, 1888』を著しているアーネスト・サトウが、その蔵書を含め日本文献に通じ

ていたことはつとに有名である。また、京都大学附属図書館との関わりについて云えば、新村出館長時代の1914（大正3）年5月にアーネスト・サトウ旧蔵書『日本イエズス会年報』122点が購入されていることである。リストは『Bibliographischer Alt-Japan-Katalog, 1542-1853. Kyoto, Deuches Forschungsinstitut, 1940』に収録・掲載され、概略が『京都大学附属図書館60年史』に紹介されているところから、その内容については容易にうかがい知ることができる。

先のサトウの手許で重複していた旧蔵書は、いずれかの時期に売り払われ、書店を通じ上野精一の入手するところとなり、上野文庫の1点として経済学部に入り、京都大学所蔵アーネスト・サトウ旧蔵書を1部ふやすことになったものである。奇しき縁といえよう。

次の「旭江文庫」は、新村出、厨川白村、浜田青陵等と当時親交のあった大賀寿吉が、武田製薬に勤めるかたわら“絶大な情熱と努力”をもって収集したダンテの作品600点をはじめとするコレクションである。コレクションの内容は、「附属図書館の逸品『旭江文庫』」（2）にみられるように、“同文庫は1502年から1936年までに刊行されたダンテの著作の原典・原典の各国語訳書・研究書・学術書を含む三千点からなり、量的にも質的にも日本随一の蒐書である。文庫中の圧巻は何と云っても、『神曲』である。写本・揺籃期本は集められていないものの、1502年のアルド版、1512年ランディーノ注解のスタニーノ版をはじめとする千五百年代の主要な刊本が見事にそろっている。その他の世紀の刊本も重要なものは漏れなく集められており、総数約百八十点にのぼる。『神曲』以外の著作についてもその充実ぶりは大同小異である。...したがってダンテ研究に携わるものにとっては、かけがえのない貴重な宝庫にほかならない。”との評価に尽くされるものである。一部が購入され、大部分が1939年7月、故人の遺志により京都大学に寄贈された。大賀寿吉その人、あるいはコレクションについては、『旭江文庫』の生みの親大賀寿吉氏のこと」（3）や「詩聖ダンテに魅せられた明治人のコレクション：旭江文庫」（4）詳しい。

ところで、「詩聖ダンテに魅せられた明治人のコレクション」中には、“大賀寿吉とそのエクス・リブリス”と説明のついた写真が掲載され、“またこの文庫にふさわしい中世ヨーロッパ風の優雅なエクス・リブリスが添えられて大

賀さんの風格がしのばれるような気がする。”という表現が見られる。この蔵書票、菱形模様の中に花びらを埋め込んだようなデザインなのだが、この作者等については他の機会をみてもふれられていない。思うに、あまり一般的にはなっていないようなので、この蔵書票の作者及び由来について次に紹介しておきたい。

「蔵書票」(5)と題する書物随想中に“ 近く再び日本へ来るはずの英国の陶工バーナード・リーチが、むかしその友柳宗悦氏のために作った蕨の蔵書票、その柳氏がダンテ文献の蒐集者として著名な大賀寿吉翁のために意匠した蔵書票なども美しいものであった。”との表現があるところから、作者は柳宗悦であることが看取される。同じく「柳宗悦と本」(6)と題する随想中には“ 亡友柳宗悦が、仲のよかった民間のダンテ学者大賀寿吉のために作った珍しい蔵書票 ”とのくだりがあり、掲載された蔵書票の図柄から、蔵書票の作者は紛れもなく柳宗悦であったことがわかる。これらの随想は、蔵書票について書かれた寿岳文章の一文であるが、前者は蔵書票への関心が必ずしも充分ではなかった1933年に公表され、後者はPR誌のしかも表紙うらを利用した図録にその説明を加えるというものであったから、ともにあまり注視されることなく今日にいたったのではないだろうか。いずれにしても、柳宗悦が友人大賀寿吉にふさわしい蔵書票を考案したであろうことをこれから読みとることができるのである。

そして、さらには、この蔵書票は以下に表現されるように柳宗悦自身の思想を反映したものであったこともうかがい知ることができるのである。“ この蔵書票は昭和3年ごろの作かと記憶する。当時、柳は美しさを産み出す母型とも言うべきものが存在すると考え、それを組み合わせれば、いくらでも美しい模様ができる

との理論を立て、しばしば私にも、目の前で描いて見せ、説明した。この蔵書票や昭和4年刊の自著『工芸の道』および私の『ブレイク書誌』の扉のデザインは、すべてその理論の実践である。しかし私はここで、模様そのものよりも、模様空間にはめこんだ柳のゴシック書体に一層留意したい。美しい本の生命が、書写または印刷される字体に宿るとは、当初から柳の強い信念であつた。”と。総じて、これらからは柳宗悦、大賀寿吉、寿岳文章の間の真摯な交流や探求心がみてとれるのである。

以上ふたつの文庫にかかわることを紹介しておきたい。

- 1 高橋俊哉「上野文庫1冊のインキュナビュラについて」『静情』Vol.16. No.2 (1979年12月)
- 2 岩倉具忠「附属図書館の逸品『旭江文庫』」『京大広報』No.425 京都大学広報委員会(1992年3月)
- 3 岩倉具忠「『旭江文庫』の生みの親大賀寿吉氏のこと」『静情』Vol.29. No.3 (1993年1月)
- 4 村橋ルチア「詩聖ダンテに魅せられた明治人のコレクション:旭江文庫」『静情』Vol.19.No.1 (1982年4月)
- 5 寿岳文章「蔵書票」『政界往来』第5巻2号(1933年11月)[寿岳文章『書物の道』書物展望社(1934年12月)『寿岳文章書物論集成』沖積舎(1989年7月)に再録]
- 6 寿岳文章「柳宗悦と本 - 一枚の蔵書票を前にして - 」『ちくま』No.61筑摩書房(1974年5月)[寿岳文章『図説 本の歴史』日本エディターズスクール(1982年2月)に再録]

(まつだ ひろし)